

# 細川家史料にみる近世大名の「食」に関する一考察

## — 細川忠興の書状を分析して — その 2

八田 茂樹\*

### A Study on Daimyo's Meal from Historical Materials of Hosokawa Family In Edo Era, Part 2.

Shigeki Hatta\*

From 1633 to 1641, Hosokawa Tadaoki was presented with 296 meals by his son, Hosokawa Tadatoshi or others. I analyzed Tadaoki's letters. As a result, I found this; Tadaoki liked fish. He liked salmon best, *konowata* secondary, and *ayus*, lavers and ear shells thirdly. He was fond of a crane, a wild duck, an orange, a persimmon, a chesnut, a *matsutake*, a melon, *sushi*, rice cake, *miso* and *ume*, too.

キーワード：街道、近世、大名、食

Keywords : Kaido, Edo Era, Daimyo, meal

## 1. はじめに

### 1.1 研究の目的

筆者の主たる研究テーマは「近世街道の歴史地理学的研究」であるが、その研究の過程で、近世宿駅の二大機能の一つの宿泊機能の主要部分が「食」であり、街道沿いの宿駅に設定された本陣における大名の食事を分析すれば、近世の食に関する地域性を解明できるのではないかと考えた。そこで熊本藩の細川家を取り上げて、史料を分析することにより近世における「食」の地域性を解明しようとした。まず八田(2006)<sup>(1)</sup>(以下、「その1」と記載する)により、『大日本近世史料』細川家史料一～四の全四冊を分析した。文書番号は1～1022の、約千通である。慶長5年(1600)から寛永9年(1632)までの忠利と忠興の肥後入国時までの33年間で主として豊前1国と中津在住時ならびに江戸参勤時を対象とした。本稿は「その2」として、寛永10年(1633)から寛永18年(1641)の細川忠利死去までを主として分析した。『大日本近世史料』細川家史料五～八の全四冊である。資料番号は1023～1944の約920通である。

### 1.2 従来の研究

街道研究の一環としての食の研究は、前出の「その1」において検討したため、本稿では、その後の研究並びに本報告との関連で大事な細川家の食関係の研究について再録

を含めて言及する。

街道研究の一環としての食の研究を主導した丸山雍成(2007)<sup>(2)</sup>は、第三章の「参勤交代の旅行と在府」において、参勤交代中の大名の食事についてまとめた。同氏によると、「江戸時代の本陣における宿泊方法は、木銭形式や木銭・米代形式とそれが発達した旅籠形式があるが、それは江戸時代を通じて併存していた。この場合、その食事賄いには、大名の家中の台所(膳部)方役人の手による自身賄いと、本陣の主人に一切を委託する本陣賄い」として美濃路墨俣宿や中山道安中宿、蕨宿などを例に論じている。

筆者の使用した細川家史料に基づいて、「近世大名の食」の分析をした従来の研究は以下の三研究である。まず村井益男(1981)<sup>(3)</sup>は、筆者と同様に『大日本近世史料』細川家史料の42年間の忠利宛書状、全1800通の食物を分析しているが、実数による頻度には言及していない。また『大日本近世史料』細川家史料八は分析していない。

加藤秀幸(1984)<sup>(4)</sup>は、『大日本近世史料』細川家史料を使用して細川忠興(三斎)の好物を探った。筑前境の鮭に言及し、文書番号を記して引用するが、何年から何年までの分を検討したかは不明である。

三番目に、子孫に当たる細川護貞氏の論考がある。細川護貞(1990)<sup>(5)</sup>において『大日本近世史料』細川家史料の慶長16年7月4日から寛永7年11月3日までの138通の細川忠興の書状を分析して同人の「食」について考察した。細川護貞氏は、加藤氏と同じく、筑前境の鮭に言及し、細川忠興はぬか味噌にうるさかったことや米の炊き方を知っ

\* 共通教育科  
〒861-1102 熊本県合志市須屋 2659-2  
Faculty of Liberal Studies,  
2659-2 Suya, Koshi-shi, Kumamoto, Japan 861-1102

ていたことを指摘している。

さて2008年に、熊本城築城400年記念事業実行委員会より、熊本藩士の食についてカラー写真により復原した書物が出版された<sup>(6)</sup>。本報告で取り上げる食材がどのように調理され、どのような料理になったか一目で分かるので大変参考になる。

### 1.3 研究の方法

筆者は、『大日本近世史料』細川家史料一～七の全七冊における、慶長5年(1600)から寛永18年(1641)に至る足かけ42年間に渡る細川忠興書状を主に分析した。さらにそれに付け加えて『大日本近世史料』細川家史料八も追加分析した。上記のうち、慶長5年から慶長9年までの5年分は、前出の文献(1)で考察済みであり、本稿では忠利宛の忠興書状に関しては、五巻から七巻までの足かけ37年分を分析する<sup>(7)</sup>。五巻は寛永10年正月から始まる。前年末に、細川忠利が熊本城に入城し、忠興が八代城に入城していた。五巻は寛永11年末までを収録。六巻は寛永12年正月から寛永15年末までの書状である。七巻において、書状は寛永16年正月から寛永18年3月17日の細川忠利病死の直前まで続いている。七巻ではその後、年月日不詳を補足する。さらに『大日本近世史料』細川家史料八では、細川忠興の孫である光尚宛書状(寛永9年12月23日から年不詳まで)や、諸方宛書状(慶長5年2月12日から年不詳まで)も追加して分析した。

筆者の論考は村井氏・加藤氏・細川護貞氏の研究の追試的性格を持っている。先人の研究との差異は、後掲の史料として抽出し報告しているが、書状の日付や書状の受領場所を分析の視点に追加したこと(受領場所の推定を含める)や頻度数を測ったこと、史料八の忠利以外宛の書状も分析していることである。

## 2. 細川家史料にみる細川忠興の「食」

### 2.1 歴史的背景と全般的状況

細川忠興(三斎)は、細川家の第一代目の細川藤孝(幽斎)の子であり、第二代目にあたる。細川家は第三代目の当主細川忠利の時に、加藤家に替わって熊本に入府した。『大日本近世史料』細川家史料五は、その当時のことから描かれる。忠利が熊本城に、忠興が八代城に入ったので、本稿では主として細川家の熊本・八代在任時と、参勤交代の旅行途中並びに江戸在任時の「食」が描かれる。今回も「その1」と同様、細川忠興書状にみる食物の統計を取った。以下その結果を詳述する。なお本報告の最後に、「史料」として、『大日本近世史料』細川家史料五～八にある「食」の記述を抽出したものを記載する。

忠利や光尚そして諸方より忠興は、寛永10年から寛永18年までに296の食物を贈られている。頻度数の多い物が忠興の好物と考えられる。頻度数5以上の食物は次のようになる。魚介類では、鮭・海鼠腸・鮎・海苔・鮑・鯛・ふぐ・海月・筋子・貝である。鳥獣肉では鶴と鴨。果実では蜜柑。茸・野菜では瓜と松茸。酒では諸白と樽。穀飯では鮓と餅。

調味料では味噌である。このうち最も多いのが鮭となっている。当時、鮭は遠賀川でも獲れたため、今日、東の鮭・西の鰯といわれるような地域性を示す「年取り魚」としてのイメージよりも西日本で食べられているように思われる。

### 2.2 魚介類

魚介類は全部で128回登場している。うち最も多いのが「鮭」で18回である。具体的記述例としては、越後塩引・鮭之塩引・塩引・白鮭三尺子籠・越後子籠鮭・鮭の黒漬・江戸よりの鮭、鮭の切漬・鮭ノひらき・鮭ひらき・鮭糟漬である。越後や江戸の鮭を食しているのが分かる。

次に多いのが、海鼠腸の11回である。見すみこのわた・伊勢海鼠腸・尾張海鼠腸・ほんもくこのわた、という記述がある。今日の熊本県三角・三重県・愛知県・神奈川県ということになり、地元と参勤交代ルート上から、大好物の海鼠腸を贈られ、食していたのが判明する。

鮎・海苔・鮑(鮑)が9回登場する。鮎は、鮎之切漬・疋田鮎・美濃のあぶりあゆ・ひけ田流し之鮎・菊池川鮎之切漬・生鮎・鮎糟漬、と記される。菊池川の他に、福井県敦賀市の疋田や岐阜県の鮎を食している。

海苔では、菊池海苔・菊池のり・のろ海苔・日向川苔・大嶋のり・十六島苔・品川苔、とある。菊池川の川海苔の他、宮崎や江戸海苔がある。

鮑は、(忠利が佐賀関にて調達した)鮑や、(佐賀関の)塩煮の鮑・塩煮之鮑・けつり鮑・生鮑などの記述があり、豊後街道の先端の豊後水道に面した佐賀関で、忠利が新鮮な鮑を捕獲し、忠興に贈ったことが分かる。

鯛とふぐが各6回出てくる。鯛では、はらかの鯛・塩小鯛・塩鯛・沖津鯛・甘鯛ほしか、という記述がある。はらかの鯛とは、けんちん汁にする腹赤鯛で、沖津鯛とは静岡県興津の鯛のことである。

ふぐに関しては、かな澤ぶく・鎌倉之ぶく(干河豚)・金澤ぶく・金澤鯪などの記述がある。金澤とは武蔵国久良岐郡つまり現神奈川県のおふぐということで、江戸湾(東京湾)ということになる。

次いで5回登場するのが、海月・筋子・貝である。それぞれ、カイゲツ・南蛮海月・生くらげ、すちこ・越後よりのすちこ・鮭之子・子籠、塩煮ノ貝・新赤貝・博多之ねりあさりなどの記述がある。新潟の筋子や博多のあさりなどが献上されていることが分かる。

鮒は4回登場する。筑後大鮒との記述がある。筑後川の鮒であろうか。

蠣(蛎)・昆布・鯉・鱒・鰹・鰯・鯖・時雨がそれぞれ3回登場する。蠣では、玉名かき・玉名産の蠣、蠣(立花立茂より)とあり、玉名沖や柳川沖の有明海産の蠣が食されているのが分かる。昆布は、こふ・けつりこふ・昆布と記される。鯉では、阿波之鯉・生鯉・板押之鯉とされる。徳島の鯉を食している。鰹では蒸鰹・日向之なまひの蒸鰹であり、宮崎の鰹を食す。鱒は塩鱒である。鰯は、丹後鰯と隠岐鰯で、鯖も能登鯖と、いずれも日本海産を食している

のが分かる。時雨は時雨壺として出てくる。蛤のしぐれ煮のことであろう。

2回登場するのが、鱈・鱸・雑漁・からすみである。鱈は、隠岐之鱈・鱈(中国より)との記述がある。( )内は翻刻者による注意書きであるが、中国とは中国地方であろう。鱸は干鱸であり、山陽道矢掛宿の本陣史料<sup>(8)</sup>でも見られたが、瀬戸内海産と推察する。雑魚は、「いりさこ」と記され、「煎雑魚」と括弧書きされる。からすみは、「からすみ」又は「ほらのこ」と書かれる。1回のみ登場するのは以下の魚である。鯛 [かれい]・かます(水かます)・このしろ、海老(ほしゑひ)・鱈・ひしこ(尼崎ひしこ)・海茸・海草・天干・ふりこ・はらゝ子・阿波ノ王餘魚之ひらき・烏賊・鯛・鮓。ふりこは鯛の子か。王餘魚とはカレイやヒラメのことである。

ここで「その1」(慶長5年から寛永9年の33年間の統計)と比較する。一番多いのが鮭であり、「その1」と同様である。鯛が減り(10回登場→6回)、海鼠腸が増えている(3回→11回)。海鼠腸は忠興の好物であり、しばしば三角の海鼠腸が登場することから、産地も近く多く献上された物と考えられる。鮎も3回から9回に増えている。肥後の菊池川などで獲れた物と考えられる。次いで多いのが海苔・鮎・鯛・ふぐであり、海苔は菊池川の手取川などで地域性が表れている。

### 2.3 鳥獣肉

鳥獣肉は、34回登場する。そのうち最も多いのは12回の鶴である。鷹の鶴・黒鶴・真名鶴・生鶴・生黒鶴などである。当時は鶴も食の対象であったのだ。次に多いのが6回の鴨である。標記はどれも鴨である。次いで雲雀が4回登場する。雲雀ノたたき・鷹の雲雀・塩雲雀であり、鶴と同様に鷹狩りにても捕獲されたことが推測される。白鳥も3回登場し、塩白鳥などと記されやはり当時は食されたことが分かる。雁も3回登場し、塩漬けの雁と記される。冷蔵庫のなかった当時は塩漬けが一番の保存方法だったようだ。燕は2回で燕巣と記される。雉子も2回出てくる。以下は1回である。雁・珍鳥・小鳥のたゝき、鷹之鳥である。「その1」と比べる。鶴と鴨の1・2位は不変である。「その1」でそれぞれ見られた猪と狼が「その2」ではなくなっている。

### 2.4 果実

果実は、29回登場する。一番多いのが「その1」では2番であった蜜柑である。6回から13回に増加している。八代蜜柑・八代みかん・高田蜜柑 [こうだみかん]・高田みかんと記される。現八代市高田の蜜柑であったようだ。文書番号1504や1506や1603で判明するように、旅先や江戸住まいで八代蜜柑を受け取っている。「その1」で9回登場して一番であった柿は4回に減って2番手となった。御所柿・西条柿・大野柿が出てきて、奈良や広島の手取川近辺と熊本の手取川近辺の柿と言えそうだ。同じく4回登場が栗で、うち栗・八瀬(山城国愛宕郡)之栗・かり栗・かち栗と記される。梨は3回で、梨子・「しかしの梨」と出てくる。葡萄

は2回である。(長崎よりノ)葡萄、ふたう一折と記される。南蛮から贈られた物か。1回の物としては、銀杏・松子・南蛮くるみである。

### 2.5 茸・野菜

茸・野菜(大豆製品を含む)は27回登場した。一番多いのが松茸と瓜の9回である。「その1」でも1位松茸の12回、2位瓜の5回であった(松茸は減り瓜は増えているが)。松茸は、小代山松茸・(山鹿の)松茸・はなそ松茸・岩茸というように出てくる。山鹿・玉名方面の松茸を好んでいる。瓜は、落瓜・真桑瓜・干瓜・への松瓜・上條瓜と記される。真桑瓜は美濃の、上條瓜は尾張の名物である。への松瓜は現大阪府堺市の名産「舳松瓜」のことであろう。

後は各1回登場する。松露・飛騨わらび・しめじ(千本しめじ)・根深葱・椎(玉名の)つくねいも・蓮・筑後牛房・豆腐・大角豆 [ささげ] である。

### 2.6 酒

酒は21回出る。「その1」は13回なので、かなり増えている。諸白が8回で、南部諸白之新酒、諸白雨樽と記される。樽は5回で、三原雨樽などで、山陽道安芸国の酒である。みぞれ酒が3回で、みぞれ雨樽・新酒のみぞれ・みぞれと出る。各1回では、北斗酒・筑後酒・練酒・五年酒・四年酒・初鶴(酒)と記される。北斗は福岡県の「寒北斗」であろうか。

### 2.7 穀飯

穀飯は31回登場する。鮎・鮓が「その1」と同様に多く16回出てくる。海茸之鮎・鮎之子籠之鮎・鮎鮎・竹子すし・奥州の鮎の鮎、疋田鮎・鮎之鮎・みのすし・うなきのすし・鮎之こけら鮎・淀のはえの鮎・小国の鮎鮎・けら鮎・りゅうの柿鮎と記述される。東北の鮎や福井県敦賀の疋田鮎鮎・淀川のはえの鮎・阿蘇の小国の鮎鮎などが食されていることが判明する。餅は9回で、鏡・鏡餅・木曾氷餅・會津氷餅と記される。毎年のように暮れの27か28日にはお歳暮として鏡餅を受領し、木曾や會津の氷餅を食している。干飯が3回で、正宗干飯・奥州之干飯が出てくる。紀伊国(存田郡)宮崎粉、博多素麺が各1回である。宮崎粉は、かたくり粉のようである。

### 2.8 調味料

調味料が14回献上されている。味噌が5回である。ぬか味噌・梅味噌・薪味噌・とうこ味噌として出てくる。薪味噌とは、薪で大豆を煮てできた味噌のことか。1回出るのが、善徳寺酢・塩・白芥子之粉・わさび・醬・はせの粉である。「その1」で2回登場した砂糖が出てこない。

### 2.9 菓子等嗜好品

菓子等嗜好品は、12回でてくる。一番多いのが4回の梅関連の物である。梅之にく(梅肉香煎)・信濃梅・青梅漬である。茶が、唐茶・口切之茶・京下りの茶壺として3回登場する。香物は2回で、御拝山之つけ・奈良漬である。ふの焼・かるめろは各1回で、ふの焼きは和菓子・「かるめろ」は「からめら」という駄菓子か。

以上寛永10年から18年までの集計に、年不詳も追加し

て集計した。ワープロ変換できなかつた漢字をひらがな表記したものもある。また [ ] 内は筆者がふりがな注記をしたものである

### 3. おわりに

『大日本近世史料』細川家史料五～八の四冊の細川忠興の書状を分析して若干考察した結果、以下のようなことが判明した。江戸時代の食のタンパク源に関して、「その1」でも指摘したように魚介類が一番好まれたことが判明した。魚介類の中では鮭が一番である。次いで海鼠腸を好んでいる。三番目に鮎・海苔・鮑である。鳥獣肉では鶴と鴨、果実では第一に蜜柑そして柿と栗、茸・野菜では松茸と瓜、酒では諸白と樽、穀飯は鮎と餅、調味料では味噌である。また嗜好品としては梅関連である。

### 史料

以下に、『大日本近世史料』細川家史料中の細川家の食に関する記載事項を抽出した。書状番号：書状日付、書状受領場所に関する記載事項（端裏貼紙、異筆）、食に関する記載事項、の順に記す。食に関する記載事項中の [ ] には、筆者の注意書きを記した。（ ）の注意書きは東京大学史料編纂所による。一部現代の漢字に変換した。「・・・」は中略である。

① 東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料五、東京大学出版会（1976）より、細川忠興文書五（書状番号1023～1306）（寛永10年正月3日～寛永11年12月晦日）。

1030：寛永10年1月16日、八代カ、鮎之切漬をおくる。小桶一ツ進之候。

1035：寛永10年1月18日、八代カ、菊池のり。

1036：寛永10年1月19日、八代カ、玉名蠣二桶、阿波之鯉一箱給、満足申候。

1041：寛永10年1月23日、八代カ、隼之鷹、鶴捉えノ鷹ヲおくる・・・鶴ノ汁之料理仕たる者之事ニて候、一段ノ上手。

1045：寛永10年2月1日、八代カ、鴨。

1046：寛永10年2月3日、八代カ、海茸之鮎給候。

1057：寛永10年2月12日、八代カ、川尻之南天も可給由、鮎之塩引一尺。

1069：寛永10年2月26日、八代カ、越後塩引三尺、當国之鮎、近江之鮎のごとく調理ス・・・一桶給候、令満足候。

1071：寛永10年2月晦日、八代カ、松露一籠給候。

1075：寛永10年3月13日、八代カ、珍敷鯛三ツ持給候、はらかの鯛・・・懸汁ニテ食ス、菊池苔。

1088：寛永10年4月23日、八代カ、折廿、諸白樽千給候。

1093：寛永10年5月1日、八代カ、阿波ノ王餘魚のひらき一箱、香物曲物一ツ給候。

1097：寛永10年5月3日、八代カ、瓜五ツ持給候。

1101：寛永10年5月11日、八代カ、雲雀之たゞき一壺給候、満足申候。

1103：寛永10年5月23日、八代カ、蒸鯉七ひら、梅漬一壺。

1105：寛永10年5月27日、八代カ、落瓜（瓜）。

1107：寛永10年6月3日、八代カ、諸白雨樽、大角豆一籠。

1108：寛永10年6月6日、八代カ、（忠利が佐賀関にて調達した）鮑一種。

1117：寛永10年6月17日、八代カ、真桑瓜。

1120：寛永10年6月23日、八代カ、瓜二籠。

1130：寛永10年7月晦日、八代カ、八朔の祝儀、三原雨樽（酒）、鮎十五、塩一壺。

1132：寛永10年8月6日、八代カ、菊池苔。

1137：寛永10年8月19日、八代カ、御所柿、南蛮海月。

1139：寛永10年8月29日、八代カ、小代山松茸一籠三十九本、はらそ茸。

1162：寛永10年12月16日、八代カ、白鮭三尺子籠、塩引十尺給。

1166：寛永11年1月4日、八代カ、鷹ノ鶴（公方様より拝領ス）。

1179：寛永11年4月17日、八代カ、のろ苔一箱、白芥子之粉一箱給候。

1186：寛永11年6月16日、備後カ、うち栗、水かます、梅味噌、薪味噌。

1187：寛永11年6月18日、兵庫カ、干瓜一籠、銀杏、松子三箱一ツ給。

1188：寛永11年6月19日、[敦賀の] 近比カ、瓜一籠、鮎鮎、竹子すし。

1191：寛永11年6月22日、参勤途中カ、鮎一籠。

1194：寛永11年6月24日、吉田カ、奥州の鮎之鮎、正宗干飯。

1201：寛永11年7月3日、吉田カ、北斗酒二樽、白鳥一ツ、蠟燭三百挺。

1203：寛永11年7月6日、吉田カ、菊池苔、生くらけ、生鯉。

1205：寛永11年7月10日、吉田カ、への松瓜一籠十五、飛騨わらひ。

1210：寛永11年7月14日、吉田カ、疋田鮎。

1215：寛永11年7月20日、吉田カ、上條瓜一箱十三給候。

1219：寛永11年7月23日、吉田カ、南都諸白之新酒。

1224：寛永11年7月28日、京都にて、（家光上洛に伴い）鷹の雲雀十五給。

1225：寛永11年7月29日、京都にて、（若狭の）疋田鮎。

1225：寛永11年閏7月2日、京都にて、干飯、菊池苔。

1228：寛永11年閏7月3日、京都にて、鮎之鮎。

1229：寛永11年閏7月6日、京都にて、みのすし。

1233：寛永11年閏7月8日、京都にて、塩雲雀、岩茸。

1239：同年閏7月12日、京都にて、美濃之あぶり鮎。

1241：同年閏7月16日、京都にて、鱒、鱈。  
 1248：同年閏7月24日、京都にて、美濃ノあぶりあゆ。  
 1249：同年閏7月25日、京都にて、南蛮くるみ。  
 1251：同年閏7月26日、京都にて、八瀬（山城國愛宕郡）之栗。  
 1254：同年閏7月28日、京都にて、新赤貝。  
 1260：寛永11年8月5日、日比にて、梨子、鯛。  
 1267：寛永11年8月14日、八代、松茸、鮑。  
 1269：寛永11年8月29日、八代カ、千本しめぢ（占地）、松茸。  
 1273：寛永11年9月7日、八代カ、ねふかの種（根深葱）。  
 1274：寛永11年9月18日、八代カ、鮭、このしろ。  
 1276：寛永11年9月21日、八代カ、時雨壺、初鶴一ツ（酒）。  
 1279：寛永11年10月5日、八代カ、鷹ノ鴈鴨。  
 1280：寛永11年10月8日、八代カ、かち栗。  
 1287：寛永11年10月27日、八代カ、玉名産ノ蠣。  
 1288：寛永11年11月4日、八代カ、筑後牛房。  
 1289：寛永11年11月7日、八代カ、三河流ノ海鼠腸。  
 1290：寛永11年11月22日、八代カ、海鼠腸。  
 1295：寛永11年11月晦日、八代カ、海鼠腸。  
 1297：寛永11年12月18日、八代カ、西条柿、隠岐之鱒二ツ、鱒一ツ。  
 1300：寛永11年12月26日、八代カ、〔東海道吉原宿名物の〕善徳寺酢、鮎、塩煮ノ貝を賞味ス。  
 以上の寛永10年～11年の特記事項として、書状番号1258で「おっとせいのふとん給」、1261で忠興は大里、忠利は鶴崎へ着。なお、5巻以降も場所についての記述がないため、諏訪勝則氏による年譜<sup>(9)</sup>と記載事項から判断した。

② 東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料六、東京大学出版会（1978）より、細川忠興文書六（書状番号1307～1555）（寛永12年正月3日～寛永13年12月28日）。

1324：寛永12年5月1日、〔東海道駿河国〕岡部にて参勤途中、越後子籠鮭、塩煮之鮑一箱、わさひ一箱。  
 1325：寛永12年5月1日、岡部にて参勤途中、味噌  
 1327：寛永12年5月2日、駿河国三枚橋（現沼津）カ、梅之にく（梅肉香煎）、椎、塩樽一ツ、寒之中之味噌一箱。  
 1329：寛永12年5月10日、江戸カ、豆腐3丁、いりさこ（煎雑魚）一籠。  
 1336：寛永12年5月18日、江戸カ、ふの焼。  
 1388：寛永12年9月9日、帰国途中三枚橋、御所柿、鮭之黒漬、鮎之鮓。  
 1389：寛永12年9月11日、丸子（駿河）にて、とうこ味噌、ほしゑひ（干海老）曲物一ツ、香物一箱。  
 1393：寛永12年10月10日、八代カ、（玄猪ノ祝儀として）餅。  
 1400：寛永12年12月2日、八代カ、塩白鳥、鮭ノ切漬、

時雨之壺。  
 1402：寛永12年12月7日、八代カ、すちこ（筋子）曲物一ツナハ、かな澤ぶく（金沢河豚）一箱廿給。  
 1406：寛永12年12月28日、八代カ、（年頭）鏡。  
 1410：寛永13年1月17日、八代カ、鮭ノひらき。  
 1424：寛永13年6月18日、八代カ、（忠利が初めてつけた）瓜一籠廿給。  
 1426：寛永13年7月4日、八代カ、飯鮓一桶、ひけ田流之鮎。  
 1429：寛永13年7月13日、八代カ、飯鮓一桶、鮎之鮓一桶、紀伊国（在田郡）宮崎粉五袋。  
 1432：寛永13年7月26日、八代カ、鮎之鮓、日向之川苔給。  
 1433：寛永13年7月27日、八代カ、塩小鯛七枚、能登鯖、是も昨日参由、我々好物ニ候間、諸白一樽、筑後酒一樽。  
 1434：寛永13年8月1日、八代カ、（八朔ノ祝儀として）板押之鯉、博多素麵。  
 1435：寛永13年8月1日、八代カ、松茸廿五本、初物。  
 1439：寛永13年8月7日、八代カ、（立花忠茂より）蠣一俵。  
 1440：寛永13年8月8日、八代カ、鱒百、好物。  
 1446：寛永13年8月24日、八代カ、千鱈一箱、うなきのすし一桶。  
 1451：寛永13年9月12日、八代カ、雁。  
 1452：寛永13年9月13日、八代カ、（江戸よりの）鮭、初物。  
 1454：寛永13年9月16日、八代カ、小代山の松茸又五十本。  
 1455：寛永13年9月23日、八代カ、筑後大鮓五ツ。  
 1456：寛永13年9月24日、八代カ、小代山の松茸百本給候。當国之名物二而候。  
 1457：寛永13年9月27日、八代カ、玉名郡大野柿一籠百、又日向之なまひの蒸鯉。  
 1458：寛永13年9月27日、八代カ、（出雲の）塩（仕候）鮭一尺。  
 1461：寛永13年10月16日、八代カ、（猪の祝儀の）餅。  
 1462：寛永13年10月25日、八代カ、鮭之こけら鮓一桶、同糟漬一桶、同子一桶。  
 1466：寛永13年11月晦日、京都にて、見すみこのわた（三角の海鼠腸）、鴨之もゝけ二、（烏賊）味噌漬、塩漬。  
 1467：寛永13年12月24日、京都カ、八代蜜柑三百入三籠。  
 1468：寛永13年12月27日、京都カ、八代蜜柑五百入二籠、塩煮之鮑五百入一箱、海鼠腸一桶（伊勢海鼠腸、尾張海鼠腸）。  
 1470：寛永13年12月29日、京都カ、黒鶴、菊池川鮎之切漬。  
 1474：寛永14年1月23日、京都カ、真名鶴一ツ、樽五ツ。

- 1477：寛永14年2月27日、京都カ、塩漬ノ雁一壺廿、鴨一壺三十五、南蛮海月。
- 1482：寛永14年4月21日、京都カ、鎌倉之ひふく(干河豚)、大嶋のり一箱。
- 1504：寛永14年10月19日、京都カ、八代蜜柑二箱。
- 1506：寛永14年11月18日、京都カ、八代蜜柑五百入二籠。
- 1517：寛永15年4月5日、江戸、鶴、唐茶。
- 1524：寛永15年6月1日、江戸カ、(唐人より製法を習得せし)青梅漬。
- 1527：寛永15年6月17日、江戸カ、燕巢一箱、南蛮海月。
- 1533：寛永15年8月1日、江戸カ、(佐賀関で調製の)塩煮の匏。
- 1540：寛永15年9月27日、京都にて、口切ノ茶、塩煮雀百入曲物一ツ、はるて燕巢。
- 1542：寛永15年10月10日、京都にて、鮎ノ鮓、同糟漬、諸白、南蛮海月。
- 1543：寛永15年10月13日、京都カ、八代蜜柑三百入一籠。
- 1544：寛永15年10月晦日、豊前カ、博多之ねりあさり、鮎之子籠之鮓、八代蜜柑三百入一籠。
- 1545：寛永15年11月6日、八代、鷹之鶴一ツ、鴨三十、諸白大たる五ツ。
- 1546：寛永15年11月12日、八代、(玉名の)つくねいも一籠。
- 1547：寛永15年11月20日、八代、(三角の)海鼠腸。
- 1548：寛永15年11月25日、八代、丹後鱒一ツ、みぞれ雨樽(みぞれ酒)、白鳥。
- 1555：寛永15年12月28日、八代、鏡餅。
- 以上の寛永12年正月3日～寛永13年12月28日の書状の特記事項としては以下がある。1059で「忠利参勤交代ノ供運ヲ減ズ」、1417で「家光日光社参」、1418で「松前より被取寄由候て、おっとせい一疋」、1434で「忠利の料理人、味付ケ能ク食進む」、1465で「(京都にて)貸銀をことわられる」、1500で「忠利痰長引」、1504で「島原の変」、1521で「砂糖之草二本(たんのくすり)」。
- ③ 東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料七、東京大学出版会(1980)より、細川忠興文書七(書状番号1556～1820)(寛永16年正月6日～寛永18年3月14日、と補遺)。
- 1556：寛永16年1月6日、八代、ぬか味噌、尼崎ひしこ。
- 1557：寛永16年1月7日、八代、(松平直政より)隠岐鱒三ツ、十六島苔(松平直政は松江城主)。
- 1558：寛永16年1月15日、八代、越後よりのすちこ(越後ノ筋子)一桶、子籠二尺。
- 1561：寛永16年1月21日、八代、御拝山之つけ(御拝山ノ漬物)、(あみにかけれ候)雉子五ツ。
- 1562：寛永16年1月27日、八代、高田みかん(八代郡)。
- 1563：寛永16年2月10日、筑前甘木、八代蜜柑一籠。
- 1564：寛永16年2月10日、筑前甘木、海茸一桶、からすみ曲物一ツ。
- 1565：寛永16年2月12日、豊前田川郡、けつりこふ、塩煮之貝、はるて鴨。
- 1566：寛永16年2月14日、大里にて、みかん二籠、糟煮之匏。
- 1569：寛永16年3月23日、大井川川留、木曾氷餅一箱、すちこ一桶。
- 1571：寛永16年4月1日、三枚橋カ、鮭子籠塩引二尺、甘鯛ほしか一箱、醬一壺。
- 1572：寛永16年4月2日、大磯カ、塩鱒二ツ、みかん一籠。
- 1593：寛永16年10月25日、江戸カ、天干十九給候、事外見事にて候。
- 1597：寛永16年11月18日、江戸カ、当年の鶴。
- 1602：寛永16年11月26日、江戸カ、五年酒、四年酒、新酒のみぞれ。
- 1603：寛永16年11月26日、江戸カ、八代みかん。
- 1605：寛永16年11月27日、江戸カ、八代より生鶴。
- 1610：同年閏11月5日、神奈川にて、越後鮭。
- 1611：同年閏11月6日、大磯にて、けつりこふ、けつり匏、かち栗、杉重箱一くみ、御所柿一籠。
- 1612：同年閏11月20日、京着の祝儀、鯉節三百、樽二ツ。
- 1617：寛永16年12月28日、京都カ、鏡餅、雉子、昆布、塩鯛、鯛[するめ]五十連、生匏一折有、樽。
- 1626：寛永17年5月17日、旅中カ、塩煮貝。
- 1633：寛永17年7月22日、八代カ、こか(の)梨。
- 1635：寛永17年7月29日、八代カ、小国之鮎鮓一桶。
- 1644：寛永17年8月11日、八代カ、淀(山城国)の鮠[はや]の鮓。
- 1645：寛永17年8月13日、八代カ、(山鹿の)松茸、(長崎よりの)葡萄。
- 1651：寛永17年8月20日、八代カ、雁一ツ、小代山(玉名郡)松茸三十本、ほらのこ、けら鮓(鰯ノ柿鮓)。
- 1655：寛永17年9月11日、八代カ、珍鳥。
- 1656：寛永17年9月13日、八代カ、京下りの茶壺。
- 1658：寛永17年9月16日、八代カ、時雨の壺、被鶴。
- 1667：寛永17年10月8日、八代カ、高田蜜柑(八代郡)。
- 1668：寛永17年10月9日、八代カ、鮭一尺、鯖一本(中国より)。
- 1670：寛永17年10月12日、八代カ、金澤ふく、五十枚一箱。
- 1671：寛永17年11月4日、八代カ、忠利山鹿で湯治、鮒七枚。
- 1674：寛永17年11月12日、八代カ、ふか漬の鮭。
- 1676：寛永17年11月15日、八代カ、(三角の)海鼠腸。
- 1678：寛永17年11月18日、八代カ、海鼠腸。
- 1684：寛永17年11月28日、八代カ、三角之海鼠腸。

1687：寛永 17 年 12 月 28 日、八代カ、(歳暮ノ祝儀) 鏡一餅、樽。

1690：寛永 18 年 12 月 5 日、八代カ、鷹之鶴。

1704：元和 3 年 12 月 19 日、豊後カ、鷹之鶴。

1712：元和 7 年 5 月 17 日、旅中カ、生鮎一籠、いりさこ給候。

1720：寛永 3 年 2 月 22 日、中津より小倉へ、生黒鶴。

1722：寛永 3 年 11 月 3 日、中津より小倉へ、諸白雨樽、諸白中村螢甫みそれ、何も新酒、奈良漬一籠五十入、八代蜜柑百入。

1723：寛永 3 年 12 月 27 日、中津より小倉へ、鏡餅。

1747：寛永 9 年 4 月 18 日、小倉にて、小鳥之たゞき小壺一ツ給候、風味事外勝候。

1750：寛永 9 年 7 月 13 日、江戸カ、(盆ノ祝儀) 蓮之食、鯖。

1764：寛永 9 年 11 月 15 日、中津にて、ふりこ一桶、はせの粉。

1782：寛永 9 年 11 月 29 日、竹田津にて、鷹之鳥七ツ、練酒。

1791：寛永 9 年 12 月 17 日、豊後街道途中カ、八代蜜柑。  
以上の寛永 16 年正月 6 日～寛永 18 年 3 月 14 日の書状と補遺の書状の特記事項としては、1613 で「西国衆ノ参勤ハ四月替わりが明年は三月交替とのうわさ」、1769 で「鶴崎熊本間ノ所々ノ茶屋ヲ借リタシ」などがある。  
なお 1704 以下は補遺である。

④ 東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料八、東京大学出版会（1982）より、細川忠興文書八（細川光尚宛書状、書状番号 1821～1908、寛永 9 年 12 月 23 日～年不詳）と（諸方宛書状、書状番号 1909～1944、慶長 5 年 2 月 12 日～年不詳）。なおワープロ変換できないものは□で示した。

1829：寛永 11 年 6 月 23 日、京都にて、金澤ふく一箱（武藏久良岐郡カ）、信濃梅一桶給候、何も好物にて、一人満足申候。

1834：同年閏 7 月 14 日、江戸カ、海草一箱。

1837：寛永 11 年 9 月 7 日、八代カ、鮭一尺給候、初鮭ニ満足ス。

1850：寛永 12 年 5 月 2 日、東海道参勤途中カ、かるめろ一箱、はらゞ子一桶。

1856：寛永 12 年 8 月 18 日、江戸、梨子、ふたう（葡萄）一折給。

1862：寛永 12 年 12 月 2 日、八代カ、沖津（興津）鯛、子籠之鮭二尺。

1867：寛永 13 年 4 月 14 日、江戸カ、鮭ひらき。

1873：寛永 13 年 9 月 11 日、京都カ、(上洛ノ見舞いとして贈ラル) 品川苔一箱、金津（金澤）ふく一箱。

1886：寛永 14 年 5 月 10 日、江戸カ、奥州之干飯十袋。

1887：寛永 14 年 7 月 12 日、江戸カ、會津氷餅、鯖甘桶。

1891：寛永 14 年 11 月 7 日、江戸カ、金澤□（鮎カ）、ほ

んもくこのわた（海鼠腸）一壺給候、是ハ名物、能存候。

1904：年不詳 9 月 10 日、不明、鮭あたら敷候て著候、一入御念入候と存候、已上。

以上の細川光尚宛書状の寛永 9 年 12 月 23 日～年不詳と諸方宛書状の慶長 5 年 2 月 12 日～年不詳の書状の特記事項としては、1845 で「江戸地震」とある。

(平成 24 年 9 月 25 日受付)

(平成 24 年 10 月 15 日受理)

#### 注及び参考文献

- (1) 八田茂樹：「細川家史料にみる近世大名の「食」に関する一考察—細川忠興の書状を分析して—その 1」, 熊本電波工業高等専門学校研究紀要, 第 33 号, pp.27-38 (2006).
- (2) 丸山雍成：『参勤交代』, 吉川弘文館, 270p (2007).
- (3) 村井益男：「細川家史料からみた江戸時代初期の食物」, 歴史公論, 73 号, 雄山閣出版, pp.69-72 (2007).
- (4) 加藤秀幸：「細川三斎の好物」, 飲食史林, 5 号, 飲食史林刊行会, pp.29-30 (1984).
- (5) 細川護貞：『魚雁集 細川家に残っている手紙』, 思文閣出版, 237p (1990).
- (6) 熊本城築城 400 年記念事業実行委員会：『熊本藩士のレシピ帖』, 熊本国際観光コンベンション協会 (2008).
- (7) ①東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料五, 東京大学出版会 (1976), ②東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料六, 東京大学出版会 (1978), ③東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料七, 東京大学出版会 (1980), ④東京大学史料編纂所：『大日本近世史料』細川家史料八, 東京大学出版会 (1982).
- (8) 中野美智子校注：「宿方休泊止留」(原田伴彦ほか編：『日本都市生活史料集成』8 宿場町編, pp.493-578), 学習研究社(1977).
- (9) 諏訪勝則：「幽斎・忠興関係年譜」, 米原正義編『細川幽斎・忠興のすべて』, 新人物往来社, pp. 224-266 (2000).